

氏名(国籍)	劉 ^{りゅう} 長 ^{ちよう} 輝 ^き (中国〈台湾〉)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博甲第1,445号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	山鹿素行の「聖学」とその展開
主査	筑波大学教授 広神清
副査	筑波大学教授 奈良博順
副査	筑波大学教授 博士(文学)竹村牧男
副査	筑波大学教授 文学博士 大濱徹也

論文の要旨

本論文は、江戸時代初期の儒者で古学の創唱者として知られる山鹿素行の学説と思想の特質を究明しようとするものである。

素行は自己の学問を「聖学」と称したが、「聖学」とは、儒学の古聖人が修己治人について説いた道徳的・実践的な教説を意味している。本論文は、その「聖学」が原始儒学以来の道統を継承し、人論においては「日用の学」として機能し、武士の道徳的規範としての「士道」論を基礎づけ、日本人儒学者素行をして独自の神道論を自覚せしめ、さらに兵学へと展開する様相を論述している。

本論文の構成はつぎの通りである。

序論

本論

- 第一章 素行「聖学」の基礎的考察
- 第二章 素行の「道統」・「異端」論
- 第三章 素行の「四書」解釈
- 第四章 素行「聖学」の「日用の学」への展開
- 第五章 素行「聖学」の士道論への展開
- 第六章 素行「聖学」の神道論への展開
- 第七章 素行の「聖学」と兵学

結論

付篇 素行『四書句読大全・大学』と朱熹『大学章句』の対照

序論において、著者は、本論文の目的が素行「聖学」の全体像の究明にあることを述べ、従来の先行諸研究が素行学の根幹を離れた分枝に関する研究に終りがちであったことの反省に立って、素行評価の時代的変遷を辿る。

本論第一章において、著者は、「聖学」が復古の学であることを述べる。素行によれば、儒学史上の漢・唐・宋・明の儒学はすべて古聖人の学から遠く離れて形而上の世界に遊ぶものであり、古聖人の儒学の真髄は実践を導く

教説であることになる。即ち実践的世界の教説が「聖学」である。

素行「聖学」の理論構成について、著者は、素行の『山鹿語類』「聖学篇」に依拠しつつ考察を展開する。「聖学篇」の主題は朱子批判である。朱子の『近思録』に示された彼の学問における根本的関心が、「性の本源、道の体統」に向けられていることに、素行は異を唱え、「人々一たび性心の味を嘗むれば、其の陥溺すること猶ほ淫声美色の如く、聖学日に遠ざかり、工夫竟に高ぶり、其の極は隠士逸人の列を榮とするのみ。(中略)性を玩ぶの弊は人をして邪路に陥らしむ、其の罪通るべからず」として、「性心」への拘泥は「聖学」の本筋からの離反になると説く。

素行にとって学問の関心事は、日用卑近の世界における実践躬行と他者の教化に集約されるべきであって、「性心」に関する形而上学的論議は「聖学」とは無縁であった。

第二章における主題は「道統」と「異端」との別である。「道統」とは、素行においては、人倫の理法・学問・教説が正しく受け継がれた聖賢間の系統を指す。この「道統」が教化概念であるのに対して、「正統」は、政治概念であって、血統・天命を基準とする帝位・政権が由緒正しく継承された系統を意味する。

素行の「道統」観は、先秦以降の諸々の「後世の儒学」、とりわけ朱子学という中間的存在への否定を媒介として成立した。素行の「聖学」は、「後世の儒学」を排除して、直接無媒介に古聖賢の教説につながるものである。

また、「異端」とは、「道統」の正しい伝承を妨げる異説のことであり、これには儒学内部のもの外部のものが区別される。

第三章では素行の「性」論が展開される。朱子学では、人間の「性」を「本然の性」と「気質の性」とに分けて考えるが、素行は「本然の性」を否定して、人間には「入善修道」の潜在能力があり、絶えざる学習・努力によって善たりうるとする。素行は『論語』に言う「性相近、習相遠」を最高の教説すなわち「聖教」とする。知る能力としての「性」が「教習」によって形成されるとき、認識の対象としての「善悪」を分別することができるという。

第四章は「聖学」が「日用の学」である所以の説明に充てられる。朱子は「物」と「事」とを区別しないが、素行はこれらを区別し、「物」があれば「事」が生じ、「事」の中には自ずから在るべき「定則」があるとする。「日用卑近の間」に存する「物」(人間存在も含む)に即して「事」(人間関係)があり、「事」に即して「定則」があるからには、その「定則」を究明してこれに則って行動することが「日用の学」であることになる。

第五章では「士道」論がとりあげられる。素行の生きた時代における武士は、農・工・商三民の師表として位置づけられており、武士はもはや戦闘者としてでなく人倫の道を実現する統治者としての職分の自覚を要請されていた。ここでは「聖学」は武士にとっての「日用の学」となった。

第六章においては、素行が「聖学」を基礎として独自の神道論を展開したことを述べる。素行の意図は、自国尊重の立場から、日本神話に記述されるいくつかの神勅を引用して、日本にも中国の古儒学に匹敵する「聖道」・「聖教」が厳存したことを論じることであったとする。

第七章は、素行における「聖教」と兵学との結合によって成る兵学理論の説明に充てられる。儒学の道德性と兵学の功利性とは元来相容れない水と油の関係にあるように言われるが、両者は素行においては「文武兼備」の立場から統一されているとする。「文武兼備」が「士」の基本的なあり方に適うものであり、「聖教」の指し示すところであったからであるとする。

結論の篇においては、本論文第一章から第三章までが主として「聖教」・「聖学」の基礎論に相当し、第四章から第七章までがその応用篇に相当する総括して、本論の全章で論及した内容を要約して、素行「聖学」の全体像を提示しようとしている。

付篇は、素行と朱子の学説の相違を際立たせる意味から、参考に供するため、付録したものである。

審 査 の 要 旨

江戸期儒学の一派、いわゆる古学派の儒者の中では、従来、伊藤仁斎・荻生徂徠に向けて研究者の関心が集中する傾向があり、特に戦後日本の学界においては、山鹿素行が古学の創唱者であるにもかかわらず、彼を対象とする研究は稀少であったと言ってよい。

著者の本論文は、このような傾向を打破して、素行の人と学問を正面に据え、これと取り組んだものである。就中、本論文は、素行の宣揚する「聖学」の思想体系・論理構造の解明をめざす素行学の専論として、素行学研究史上から見ても、一個の労作であると評価し得る。

著者は、本論文において、素行学を「聖学」を中軸とする多面体として捉え、その「日用の学」・「士道」論・神道論・兵学理論等の諸側面に限なく照明をあてることによって、素行学の全体像を浮き彫りにすることをめざしている。本論文のこのような特色は、著者の研究対象に寄せる全面的傾倒の結果として発揮されるものであると考えられる。

しかしなお、本論文には若干の問題点がないわけではない。

その第一は、素行学研究史の整理に係わる問題である。たとえば、丸山真男と和辻哲郎という、基本的な立場を異にする研究者の素行評価を、同次元において羅列的に紹介することの可否についての検討が、著者には未だ自覚されていないのではなかろうかという疑問が残る。

第二は、素行学の内容の検討について見ると、素行学という日本儒学における一種のラディカリズムが、江戸時代儒学史の流れの中で成立してくる歴史的契機の問題となるが、本論文では、この点に関する追究が不十分である。その分析は、徹底すれば、素行と徂徠との相違の問題にまで及んだであろうし、さらに、中国人としての著者の目に映じた日本における儒学の受容形態の考察への視野を拡大させたであろう。

第三は、素行学の眼目の一つ「日用の学」について、その外枠の形式に関する著者の説明は詳細であるが、他方、その内容に関する説明が未だ概念的な段階に止まっている。『中朝事実』に展開される素行の「日本中華論」の説明についても、ほぼ同様な憾みを遺す。

以上に述べたようないくつかの問題点を残してはいるものの、総じて本論文は、素行学の全体像の論理構造の解明を第一義の目的とする考証的研究への取り組みをめざすものであり、対象に肉迫せんとする著者の積極的姿勢は十分に評価することができる。

この観点から見れば、本論文における素行の朱子学批判に関する著者の説明は一貫した論理的脈絡に沿うものとして説得力をもつ。たとえば、朱子の「性」論と「理気」説の内蔵する形而上学的性格の批判に立脚して、素行が独自の「性」論と「理気」説を構築していく過程の論述（第二章第三節二及び第三章）において、著者の説得力は明示されている。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。